

■■メールマガジン「静岡県防災」第49号■■

～ 5月の能登半島 ～

静岡県の支援業務の終了に伴う作業のため、5月中旬の能登半島を訪問しました。

降雪の1月から一転し穏やかな新緑の季節となり、静岡とは異なる茎の細長いタンポポが目立ちます。穴水町の中心部は穏やかな内海に面しているため、小水路が市街地を縦横に巡っている事など、1月の支援時には全く見えなかった景色も見えてきました。スーパーマーケットも営業を再開し、町民の皆さんの生活は徐々に日常を取り戻しつつあるようです。

穴水町役場では、未だ避難所から通勤している職員もおられますが、皆さん元気に復興に取り組んでおられます。町内の避難所の避難者数はかなり減ってきたそうですが、仮設住宅等、次の生活に移行して頂くことが目下の課題とのことです。

～ 派遣職員アンケート（その2） ～

今回は、避難所運営に従事した応援職員の声をお伝えします。

- ・避難所では他人と常に一緒にいるような状況になるため、普段からご近所の方とはある程度顔見知りになっていたほうが良いと感じた。
- ・現地の方には「遠いところからありがとう」という言葉をいただきました。また、「友人などに片づけを手伝うからと言われていたが、まだその元気が出ない」という言葉に早急な復興とともに心のケアの必要性も感じました。
- ・避難している方の中でリーダー的な存在がいることが重要と感じました。リーダーシップを取り、まとめる役割の方がいることにより、物資の管理やその他の情報共有などの統率も図られ、避難者同士のコミュニケーションも多くなると思われます。
- ・避難所への避難中という環境においてですが、ボランティア団体によるレクリエーション支援を受けるか検討した際、避難者の方は、そういうことよりも色々な会話をしてくれる方が嬉しいと話され、私の担当避難所ではその支援をお断りすることになりました。衣食住の状況が安定してきた中ですが、よく眠れず睡眠薬を飲んでいる方も少なくない と聞き、お話をしていると自然と涙を流す方もいました。避難所生活が長引くにつれて、必要とされる支援について考えさせられるとともに、心身の負担が蓄積されていくことが心配されました。
- ・普段やっていないことは被災時にはやれないことを痛感しました。現地は地域のコミュニティーがしっかり形成されていて、近隣の方に聞くと、どの方がどこへ避難されているのか把握されていることが多く、とても助かりました。「静岡県は一番に入ってくれてありがたい」「トイレトレーラー（藤枝市や島田市等のもの）がとても快適で助かっている」という言葉をいただきました。

※前号において、「穴水町では静岡県の3名を含む、全国各地から16名の応援職員が現地に居住しながら中長期の派遣で活動していきます。」とお伝えしましたが、26名とのこと。お詫びして訂正します。